

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介「手術は、しません ー父と娘の「ガン闘病」450日ー」

団鬼六、黒岩由起子著
新潮社 2011年8月初版



はじめに

この本を手にしたとき、80歳を迎えようとしていた、ある患者さんの顔が浮かんだ。高血圧の治療をされていて、血圧手帳に朝夕の血圧をまじめに書かれていた。奥さん曰く、「朝起きてすぐ煙草を吸いながら計るので、高いんです。止めるように言って下さい。」昨年8月、不整脈のため、心臓にペースメーカーを病院で入れて貰った。以降、「先生に命を拾ってもらった。うれしい。」12月肺がんが見つかった。胸膜への浸潤があり、手術はできず、化学療法をしても予後は約1年ということであった。正月明けより化学療法が始まった。食欲も落ち、全身倦怠感も強くなった。5月中旬、長女様が相談に来られた。「本人がもう抗がん剤治療を止めたいといっている。父の気持ちもわかるが、しかし一方、少しでも治療を受けてもらい、少しでも長生きしてもらいたいとの思いもある。どうすればよいのでしょうか。」私は、答えにつまった。9月に訃報を聞いた。

慢性腎不全が悪化し、団鬼六先生、75歳のときから週に3回人工透析が始まった。その約10年前に軽い脳梗塞に罹患されている。そして、78歳の時、食道がんが見つかった。

平成22年2月インフォームド・コンセントがあった。担当医より。「手術を受けますか。受けて、一緒に戦う覚悟はありますか。」団先生は、「手術は、しません」と即答。家族は納得できなかった。

私も以前は、団先生のこの思いは理解できなかったが、今は違う。しかし、最初に述べたように、答えはもっていない。これから、我が国はますます高齢化社会となり、この問題に出会うことも多くなると思う。よって、今回は本書を紹介する。

著者の紹介

団鬼六；1931年9月1日、滋賀県生まれ。関西学院大学卒。官能小説の第一人者。食道ガンにより2011年5月6日没。享年79歳。本名、黒岩幸彦。

黒岩由起子；1967年11月22日、黒岩幸彦の長女として神奈川県で誕生。立教大学卒。2007年より団鬼六事務所の秘書に。公私にわたり、最後まで父を支え続けた。

団鬼六先生の食道がんの経過等

2010年1月嚥下困難、体重減少が認められ、食道のレントゲン検査施行。結果は一目瞭然で、大学病院へ紹介となる。ステージⅢ。まず、化学療法も併用しながら、放射合線治療を施行。2月23日、放射線化学療法より手術の方が完治できる可能性が高いと主治医より説明があったが、本人が手術を拒否し、放射線化学療法を継続。著効したが、11月、食道に再発。肺への転移も見つかる。翌年1月、食道再発に対し内視鏡的切除術施行。抗がん剤治療再開。5月6日永眠された。

本書の内容・感想

本書は、団先生が2010年、「残日録」と題され、小説新潮に連載された文章と、由起子様の記録からなりたっている。この2枚の写真のように、幼少期はお父さん子で、それからは愛娘である。写真に写っている

父娘の赤い糸、赤い絆が行間にも溢れている。実はこれは愛犬アリスの紐なのだが。私もがんに罹ってわかったことだが、平凡な日々が平凡に終わるのが心地良く、穏やかな朝を迎えられることに感謝してしまう。由紀子様のこの文章も私のお気に入りである。「不良病人」より、抜粋する。2010年10月頃のことである。

『父は左手にアリスのリード、右手に杖を持ち、私は杖をもった父の右腕を支えて歩く。親子水入らずのこの散歩は、私にとって実に愛おしい時間だった。それは幼稚園から母親と一緒に家に帰る園児の気持ちに等しい。父と共に歩きながら、いつまでこんな貴重な時間が持てるだろうかと、かつての母の手の感触を思い出しながら考えていた。』



インフォームド・コンセント後の鬼六先生のお気持ちは。「残日録 春」より。

『1ヶ月近くもかけて検査した結果、手術のできるガンの状態であり、体力にも問題がないとわかったのに、その道の権威である担当医に向かって、なおも手術を拒否したということが、息子も娘も腹立たしかったようだ。』

3年前、透析を導入することによって生き永らえたが、実はあの時点で私の寿命は尽きていたんだ。75歳から78歳までの3年間、この世に余分に生きられたことを大いに感謝している、と私は45歳の息子と、40歳の娘の顔を交互に見ていった。だから何だって言うんだよ、それ以上、寿命を延ばすのはおかしいというのか、と息子は私に向かって怒ったような口ぶりになった。「おかしい」と、私ははっきり言った。「親を無理矢理生きさせる事を、親孝行と思うな。』

また、『仕事するために生きるのではなく、死なないために生きる、ということは人間の生き様の中で、何とも空しいものであることをつくづく痛感した。』とも記されている。

これに対し、由起子様の答えは。「手術は、しません」より。

『—そうだ、父はこれでいい。私がするべきことは、父が「うまく生きられる」ために、力を尽くすことだ。』

今の由起子様のお気持ちは。「はじめに」より抄出。

『周りの人がどんなに慰めてくれようと、この手の悔恨の思いは、必ずついてまわる。私も例外ではなく、四十九日が過ぎた今もなお、父を思えば、悲しさと後悔で打ちひしがれる。父の「手術はしない」という意志を尊重したことだって、「ひょっとしたら...」と悔恨のタネになる日もあるのである。そしてひとしきり泣いた後、かつて父が口にしていた様々な言葉をジグゾーパズルのように思い出し、なんとか正常な心を取り戻している。』



私の患者様の長女さんも10月末、「最期は安らかでした。お世話になりました。」と挨拶に来られた。明るく振舞われていたが、目には光るものがあつた。同じお気持ちであつたのであろう。

理事 井上 林太郎